狐のつかい

新美南吉

青空文庫

山のなかに、猿や鹿や狼や狐などがいっしょにすんでおりました。みんなはひとつのあんどんをもっていました。紙ではった四角な小さいあんどんでありました。

夜がくると、みんなはこのあんどんに灯をともしたのでありました。

あるひの夕方、みんなはあんどんの油がもうなくなっていることに気がつきました。

そこでだれかが、村の油屋まで油を買いにゆかねばなりません。さてだれがいったものでしょう。

みんなは村にゆくことがすきではありませんでした。村にはみんなのきらいな猟師と犬がいたからであります。

「それではわたしがいきましょう」

とそのときいったものがありました。狐です。狐は人間の子どもにばけることができたからでありました。

そこで、狐のつかいときまりました。やれやれとんだことになりました。

さて狐は、うまく人間の子どもにばけて、しりきれぞうりを、ひたひたとひきずりながら、村へゆきました。そして、しゅびよく油を一合かいました。

かえりに狐が、月夜のなたねばたけのなかを歩いていますと、たいへんよいにおいがします。気がついてみれば、それは買ってきた油のにおいでありました。

「すこしぐらいは、よいだろう。」

といって、狐はぺろりと油をなめました。これはまたなんというおいしいものでしょう。

狐はしばらくすると、またがまんができなくなりました。

「すこしぐらいはよいだろう。わたしの舌は大きくない。」

といって、またぺろりとなめました。

しばらくしてまたぺろり。

狐の舌は小さいので、ぺろりとなめてもわずかなことです。しかし、ぺろりぺろりがなんどもかさなれば、一合の油もなくなってしまいます。

こうして、山につくまでに、狐は油をすっかりなめてしまい、もってかえったのは、からのとくりだけでした。

待っていた鹿や猿や狼は、からのとくりをみてためいきをつきました。これでは、こんやはあんどんがともりません。みんなは、がっかりして思いました、

「さてさて。狐をつかいにやるのじゃなかった。」

と。

青空文庫情報

底本：「ごんぎつね　新美南吉童話作品集1」てのり文庫、大日本図書
　　1988（昭和63）年7月8日第1刷発行
底本の親本：「校定　新美南吉全集」大日本図書
入力：めいこ
校正：もりみつじゅんじ
2002年12月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狐のつかい

新美南吉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/